

回顧録



松崎自動車整備工場・身内四人で開業

前号では、私が社会人として一步を印すまでの青少年期を回顧してみた。引続き、その後を振り返ってみたい。兄が起業した松崎自動車整備工場に入社したのが昭和五十二年のこと。当初は、兄夫婦と私、兄嫁の弟、親族四人でスタートだった。従業員は身内だけで

仕事は、お客様の納期を優先することから、夜の九時・十時まで働くことも日常茶飯事だった。そんな松崎自動車会社がらしい佇まいを整えるようになったのは、新卒者の採用を始めてからとなる。私は、工場長として作業現場をまとめる立場になった。問題があ

農事組合法人 『さんわ担い手組合』

代表理事 鈴木 敏雄

シリーズ ②

夜間の仕事も日常茶飯

自営事業を通じ 物事をまとめ上げる必要性学ぶ

れば、避けて通るのではなく、事の本質を捉え改善につなげる、小さな組織ながら、物事をまとめあげる必要性を学んだ時期だった。今にして思えば、こうした体験が、後の法人運営にも役立ったように思う。

一方、家庭人としての私は、平成四年、三十五歳で結婚。これを契機に自らの会社、カーサービス鈴木を設立。独立し自立の道へと進んだ。

現在は三人の子供、それぞれ成人し自立と、六人の孫に恵まれた。話題が横道にそれたが、本題である農事組合法人に話を戻そう。

磯ヶ谷・松崎と二日市場・山田(各一部)の農地を対象に、平成十七年からスタートした土地改良区の担い手育成基盤整備事業は、地域農業の活性化と農業の担い手確保を目的としていた。その具体的手段が農事組合法人化と耕作者となる担い手組合の組織化だった。このため、域内の専業農家二軒を中核とした法人設立準備会が立ち上がり、平成二十二年、その努力が実り、「農事組合法人さんわ担い手組合」が発足した。しかし、その後の道筋は決して平坦ではなかった。

【次号へつづく】



特別養護老人ホーム あじさい苑の待まり



【お話を頂いた桑田施設長】

平成十一年社会福祉法人「三和会」を発足

スタッフの育成と共に 順次業務拡大・現状に至る

さわかぜ編集委員会では、三和地区内に立地する高齢者福祉施設の内、社会福祉法人として地域社会に貢献する三つの施設を順次ご紹介していきます。

本号では、社会福祉法人「三和会」の特別養護老人ホーム、「あじさい苑」を訪ね、施設長の桑田恵美子さんに事業の概要をお伺いしました。

Q 社会福祉法人としての沿革についてお聞かせ下さい。

A 高齢化に伴う社会的ニーズに 대응することを目的として、三和の名の下に

平成十一年七月に社会福祉法人「三和会」が設立されました。

事業としては、その翌年の四月より、通所介護のデイサービスセンター「あじさい苑」からスタートしています。

Q スタートは、デイサービスからですね。

A そうです。最初から全てが整っていたわけではありませんが、実践と経験を蓄積する中で、順次、

スタッフの育成と業務の拡大に取組んで来たのです。

介護老人福祉施設・特別養護老人ホームや、短期入所生活介護(ショートステイ)サービスは平成十四年に業務を開始。その翌年十五年からは在宅介護支援センターも立ち上げ、居宅介護支援にも取組んでいます。

Q 入所者の定員と介護度との関係は如何ですか？



A 入所定員102名ですが現在99名の方が入所されています。

入所率は97%、平均介護度は、4.1となっています。

Q 今、大変に思われることは何でしょうか？

A コロナの影響です。ご家族との面談や、入所者が楽しみにしているイベントなど、多くの面で制限を受けざるを得ないことです。元気を保つ上で必要な人の交流が阻害されていることです。

< 施設概要 >

経営主体	社会福祉法人 三和会
理事長	鶴岡 義明
名称	特別養護老人ホームあじさい苑 定員50名
	ショートステイサービスあじさい苑 定員12名
	特別養護老人ホームあじさい苑/ユニット型 定員30名
	ショートステイサービスあじさい苑 定員10名
	デイサービスセンターあじさい苑 定員30名
	あじさい苑在宅介護支援センター
敷地面積	6,640.70㎡
建物面積	3,310.59㎡
延床面積	5,314.19㎡
建物構造	鉄筋コンクリート造り 地上2階
職員構成	施設長、介護支援専門員、介護職員 看護職員、生活相談員、事務員 栄養士、医師
	協力病院

Q 施設として、最も気遣われていることは、何でしょうか？

A 施設臭を感じさせない清潔な環境維持です。スタッフ共々、衛生面

への気遣いを徹底し、来苑者からも好評を頂いております。

※日常的なご苦勞も多いかと思いますが、引き続き福祉貢献を祈念致します。



交わす挨拶元気を貰う 一念発起で児童見守り

光風台へお住いの小川三造さん(八十三歳)へ、昨年、千葉県知事より感謝状が贈呈されました。小川さんは、退職を機に家にこもる生活ではな

く、健康な内は地域社会に貢献したいとの思いが強かったそうです。

そんな折、児童登校見守りの話を耳にし、それなら、自分にも出来る一念発起。以来、光風台小学校の児童登下校に合



【まだまだ元気と語る小川さん】

で自主的に開始。いざ、取組んでみると、子ども達と交わす挨拶から、自分自身が元気を貰っているような、そんな感じを懐いたそうです。

以来十余年の長きに亘る活動が感謝状に繋がった訳ですが、一緒に取組んで頂ける友が欲しいと希望も語ってくれました。